

主 題：尊ばれない故郷にあつて

聖書箇所：ヨハネの福音書 4章43－54節

この朝、皆さんと一緒に見ていきたいのは、ヨハネの福音書4：43－54のみことばです。前回、ヨハネを学んでから少し間が空いてしまいましたが、きょうは4章の最後の部分に戻って、偉大なイエス様の姿に目を留めてみたいと思います。まずはいつものようにみことばをお読みしますので、それぞれ神様のことばに耳を傾けてみてください。

ヨハネ4：43－54

「:43 さて、二日の後、イエスはここを去って、ガリラヤへ行かれた。:44 イエスご自身が、「預言者は自分の故郷では尊ばれない」と証言しておられたからである。:45 そういうわけで、イエスがガリラヤに行かれたとき、ガリラヤ人はイエスを歓迎した。彼らも祭りに行っていたので、イエスが祭りの間にエルサレムでなされたすべてのことを見ていたからである。:46 イエスは再びガリラヤのカナに行かれた。そこは、かつて水をぶどう酒にされた所である。さて、カペナウムに病気の息子がいる王室の役人がいた。:47 この人は、イエスがユダヤからガリラヤに来られたと聞いて、イエスのところへ行き、下って来て息子をいやして下さるように願った。息子が死にかかっていたからである。:48 そこで、イエスは彼に言われた。「あなたがたは、しるしと不思議を見ないかぎり、決して信じない。」:49 その王室の役人はイエスに言った。「主よ。どうか私の子どもが死なないうちに下って来てください。」:50 イエスは彼に言われた。「帰って行きなさい。あなたの息子は直っています。」その人はイエスが言われたことばを信じて、帰途についた。:51 彼が下って行く途中、そのしもべたちが彼に出会って、彼の息子が直ったことを告げた。:52 そこで子どもがよくなくなった時刻を彼らに尋ねると、「きのう、第七時に熱がひきました」と言った。:53 それで父親は、イエスが「あなたの息子は直っている」と言われた時刻と同じであることを知った。そして彼自身と彼の家の者がみな信じた。:54 イエスはユダヤを去ってガリラヤに入られてから、またこのことを第二のしるしとして行われたのである。」

今からさかのぼること70年前となる1955年、ジム・エリオットを含めた5人の宣教師たちは、エクアドルのジャングルに住んでいたアウカ族に福音を伝える計画を立てていました。このアウカ族は当時、文明から最も遠い民族とも言われ、外部の人間を激しく拒絶する存在として知られていました。実際彼らの残虐性はあまりにもひどく、周りの部族や彼らの土地を狙う石油会社などを頻りに襲撃することもあれば、同じ部族内でも争いや殺し合いが日常茶飯事でした。幼い頃から三メートル近い槍を使う訓練を受けてきた彼らの間では、怒りを抱けば殺人を犯し、ひとりが殺されれば残った家族がその相手に復讐をするといった暴力の連鎖が終わることなく続いていたのです。間違いなくそんな場所に行けば、いのちの保証はありませんでした。恐ろしく危険な彼らのもとを訪れたいと思う人もだれもいませんでした。

しかし、5人の宣教師たちは違いました。ひどい扱いを受け、いのちを落とす可能性が大きいとわかっていても、彼らは福音のために自ら会いに行きました。そして、数日後には全員が殉教することになるのです。多くの人には理解できないことかもしれませんが、いったいどうしてひどい目に遭い、自分たちのいのちが奪われると知っていて、彼らは行くという選択を取ったのでしょうか？その一つの理由を5人のうちのひとり、ネイト・セイントが手紙に残していました。亡くなる少し前の12月18日、彼は全員の思いを代弁することばをこのように書き記していたのです。

●宣教師ネイト・セイント

「このクリスマスの素晴らしいひとときに、キリストを知る私たちは、一度も福音を聞く機会もなく、キリストのいない暗闇に落ちていく人々の叫びを聞こうではないか。主がそうされたように、憐みの心を持って動こうではないか。暗闇の中から連れ出されずにいる人々のために、悔い改めの涙を流そうではないか。ベツレヘムの喜びに満ちた光景の彼方に、ゴルゴダの丘の想像を絶する苦しみを見ようではないか。神よ。今、アウカ族をクリスマスと神の恵みから切り離して考えることはできません。神は富めるにもかかわらず、私たちのために貧しくなられました。それはその貧しさによって私たちが富める者とされるためでした。その永遠の愛によって。私たちが自らを省みることができるよう。主よ。私の心に語り、主の聖なる御心と、その中を歩む喜びを私に教えてください。」(『ジャングルの殉教者』 p 126)。

だれもが行きたがらないような場所へと彼らの足を突き動かしたものの、それはまだ主を知らない人たちへの彼らの愛でした。たとえどんな犠牲を払うことになったとしても、彼らはあきらめずに救いをもたらすことのできる福音を、熱心に語ろうとしました。拒絶されるかもしれない人々のもとへ彼らの足を喜んで向かわせたのは、彼らの心にあった大きなあわれみだったのです。そして、これは5人の宣教師のうちのみ見られるものではありません。ほかのだれよりも愛するイエス様のうちにこそ見られる姿でした。

この朝、私たちが見ようとしている4：43－54を読んだ時にも気づいたかと思います。この箇所にはイエス様が行われた二つ目のしるし、王室の役人の子どもをいやす様子が記されていました。おそらくこの場面については、何度も耳にして皆さんもよくご存じでしょう。ここでなされていたいやし自体も確かにすごいものでした。しかし、覚えていてほしいのは、ここにはイエス様のなされた力強い奇跡以上に、それを行った主の寛容さ、慈悲深さがあふれているということです。この箇所には、ご自分を憎み、忌み嫌う数多くの者たちのもとへ、喜んで向かおうとされたイエス様のあわれみの心が明白に描かれているのです。いったいそれはどのようなものだったのか、きょうはその姿を三つ考えてみたいと思います。まだ主のあわれみを知らない方がいるのであれば、主が持つておられるあわれみの心をさらに知っていくことを通して、そのあわれみを知ってください。すでに自分のこととしてそのあわれみを知っているとされる皆さん、主のあわれみにすべてをゆだねて、そして主のあわれみに似た者としてますますともに成長していきましょう。

○イエス様が示された“憐れみの心”

1. ご自分を拒絶する者たちに対してのもの 43－45節

43節のところからこのように始まっていました。「:43 さて、二日の後、イエスはここを去って、ガリラヤへ行かれた。:44 イエスご自身が、「預言者は自分の故郷では尊ばれない」と証言しておられたからである。」と。さて、一連の流れを少し思い出ししてみてください。ここでガリラヤへと向かって行かれたイエス様ですけれども、この直前まではどこにいましたか？弟子たちと一緒にサマリヤの町にいました。かつて、ユダヤ人とサマリヤ人との間には大きな壁、敵意や憎しみが存在していたのです。しかし、イエス様には何の関係もありませんでした。世の救い主として来られたお方は、自らサマリヤを歩いて行かれ、そこで出会った女性や町の人たちに救いをもたらされていたのです。当時のユダヤ人たちの考えからすれば、救いから最も遠く離れ、汚れていた存在のサマリヤの人々にも神様の愛やあわれみの御手が分け隔てなく届いていたのです。イエス様を信じて、救われて喜びにあふれていた町の人たちの様子は、一つ前の42節にもはっきりと記されていました。「そして彼らはその女に言った。「もう私たちは、あなたが話したことによって信じているのではありません。自分で聞いて、この方がほんとうに世の救い主だと知っているのです。」と。人の目には何の収穫も期待できないように思えた場所での働きは、こうして大成功に終わりました。救い主は人々から受け入れられ、ほめたたえられ、多くの実を見ることになったのです。

そして、その後でイエス様が向かったのは自分自身が育った故郷、ナザレの町もあるガリラヤでした。サマリヤの人たちと違って、ガリラヤに住んでいた人々は聖書や救い主の知識に関して、多くのものを持っていました。イエス様の教えを何度も聞いたりし、なされた奇跡すら何度も目にし、ある者たちはイエス様が幼い頃から知っていたりもしました。サマリヤと比べるとあれば、本来ならこの人たちこそイエス様を受け入れて当然の人たちでした。しかし、実際彼らほど自分たちの罪を愛して、最もかたくなに、主を拒絶し続けた者たちはいなかったのです。ほかの地域であがめられ、尊ばれ受け入れられていた救い主は、自分自身の故郷において、自分自身をよく知る者たちのところにおいて最も尊ばれませんでした。その悲しい現実をイエス様ご自身もほかの箇所でも、同じように繰り返し語っていました。

たとえば、イエス様もマタイ 13 : 54 - 58 でこのように言われます。「:54 それから、ご自分の郷里に行き、会堂で人々を教え始められた。すると、彼らは驚いて言った。「この人は、こんな知恵と不思議な力をどこで得たのでしょうか。:55 この人は大工の息子ではありませんか。彼の母親はマリヤで、彼の兄弟は、ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではありませんか。:56 妹たちもみな私たちと一緒にいるではありませんか。とすると、いったいこの人は、これらのものをどこから得たのでしょうか。」:57 こうして、彼らはイエスにつまずいた。しかし、イエスは彼らに言われた。「預言者が尊敬されないのは、自分の郷里、家族の間だけです。」:58 そして、イエスは、彼らの不信仰のゆえに、そこでは多くの奇蹟をなさらなかった。」と。イエス様の近くにいた人たちはイエス様の教えを耳にして驚嘆し、奇跡の力を目の当たりにしながら、この方を素直に受け入れようとはしませんでした。最もすばらしい宝は目の前にありました。しかし、不信仰という暗闇の中を歩んでいた彼らは、その宝にはいっさい気づかず、逆にその宝につまずいて転んでいたのです。ガリラヤ人たちは最も身近にいた者をかたくなに拒みました。最も身近にいた者がイエス様を忌み嫌いました。表面上は大喜びで歓迎しているように見えることがあったとしても、心からこの方を受け入れ信じようとはいっさいしていませんでした。

ヨハネ 4 5 節に「そういうわけで、イエスがガリラヤに行かれたとき、ガリラヤ人はイエスを歓迎した。彼らも祭りに行っていたので、イエスが祭りの間にエルサレムでなされたすべてのことを見ていたからである。」と記されています。ガリラヤ人は迎えてはいました。しかし、救い主としてではありません。単に、自分たちの必要を満たしてくれる便利な存在としてでした。エルサレムで行っていたさまざまな奇跡を目撃していた者たちは、素直にイエス様を受け取るのではなく、イエス様が与えてくれるものだけを求めていたのです。イエス様がやって来た時に彼らは思いました。すごいことをなさる方が自分たちの町にやってくてくださったと、私たちの間でももっと奇跡をなしてくださいと、私たちはもっと信じられない驚くべきことを見たいですと。彼らの心はかたくなでした。

立ち止まってちょっと考えてみてください。果たして、私たちならどうするのでしょうか？これから自分が行こうとしている先が自分自身を求めるのではなく、ただ自分を利用しようとする人たちであふれているとわかっていたなら、これから自分が会おうとしている人々が自分を忌み嫌い、憎み、拒絶するとあらかじめわかっていたなら、私たちはそのような場に自ら進んで向かおうとするのでしょうか？みことばや福音を語ったとしても、かたくなに耳を貸そうとせず、どれだけ自分自身があわれみや優しさを示したとしても、それを感謝もせず、逆に私たちを拒むかもしれないとあらかじめわかっていたとしたら、それでもその人に対して変わらずに語ろうとするのでしょうか？それでも変わらず私たちはあわれみを示そうとするのでしょうか？それともあらかじめそれを知っていたら、そのような人を避けようとするのでしょうか？その人には何を言っても、何をしても仕方がないとあきらめてしまうのでしょうか？イエス様はご自分が拒絶されるとわかっている、なお自らガリラヤへと行かれました。ご自分のことばに素直に耳を傾けて、喜んで受け入れてくれたサマリヤにとどまり続けるのではなかったのです。自分のことを喜んで、受け入れてくれる人がいるサマリヤにとどまり続けることはどんなに楽で、容易なことだったと思いませんか？その場にとどまり続けて、彼らが成長していく様子見ながら彼らとともに時間を過ごす

ことは、どんなに簡単なことだったでしょう。しかし、主は2日の後にそこを立って、自分を拒む者たちのところに行きました。自分を憎んで迫害し、そして、最後には「十字架につける。」と叫び続ける者たちにも救いの良い知らせをもたらそうとして、喜んで自分をささげられたのです。これが拒絶する者たちに示されたイエス様の深いあわれみの心でした。

そうだとすれば、私たち自身も覚えることができます。福音を宣べ伝えようとする時に、拒まれることは確かに多くあります。身近な人や家族や親しい友人に何度伝えても、いつまでも救い主を信じようとしなないかもしれません。自分自身がへりくだって、あわれみを示そうとしてもそのあわれみを拒まれるかもしれません。しかし、私たちはそれであきらめはしないということです。そのような者たちから自分の身を引いて、自分自身を受け入れて、喜んでくれる人だけと時間を過ごすではありません。私たちの模範である主はだれよりも拒絶されたお方でした。私たち自身も以前はこの方のかたくなに拒み続けていました。しかし、この方の変わらない愛とあわれみを知ったからこそ恵みによって救われたのです。変わらないあわれみのすばらしさを私たちは知ったのです。ですから私たちもこの方の足跡にならって、たとえ自分を拒絶する者に対しても、あきらめずに変わらぬあわれみの心を示し続けていくことが大切でした。

2. ご自分を間違った理由で求める者に対してのもの 46-53節

みことばに戻ってください。ヨハネ4：46-47に「46 イエスは再びガリラヤのカナに行かれた。そこは、かつて水をぶどう酒にされた所である。さて、カペナウムに病気の息子がいる王室の役人がいた。47 この人は、イエスがユダヤからガリラヤに来られたと聞いて、イエスのところへ行き、下って来て息子をいやして下さるように願った。息子が死にかかっていたからである。」と続いています。ここに、今回の中心人物が登場していました。ガリラヤのカナに来られたイエス様のもとに、病気の息子を持った王室の役人が飛んで来ていたのです。特に、三つの点に注目してみてください。

▶カペナウム

カペナウムからカナの町までは約35キロの道のりでした。この数字を聞いてもピンとこないかもしれませんが、約35キロというのは、直線距離にして今私たちのいる塚から上に上がるとすれば、およそ高槻市ぐらまでの距離でした。当時、電車も車も電動自転車もないそのような中で、この役人は一日、二日かけて自らの足で、もしくは馬に乗って必死にやって来たのです。

▶王室の役人

この人物は王室の役人でした。おそらく彼はこの時代の地方総督だったヘロデ・アンティパスに仕えていた人物でした。それゆえに、彼は大きな権力や影響力だけでなく、多くの富も所持していました。欲しいものなら何でも手にすることができるような非常に身分の高い人物だったのです。

▶願った

カペナウムに住んでいた王室の役人がイエス様の前で願っていました。願っていましたとだけ聞くと軽く聞こえるかもしれませんが、この願ったということばは、懇願するとか、しつこく必死に願い続ける姿を表すものでした。

想像してみてください。大事な息子が病気で死にかけていた役人は、この時点までにありとあらゆる手を施していたでしょう。問題を解決するために最高の医者を呼んできて、最高の薬を使って、専門家の意見も多く聞き、多くの労力やお金も費やしていたでしょう。しかし、どんな手を尽くしても彼自身には息子の苦しみを取り除くことができませんでした。普段なら欲しいものは何でも望めば手に入るのに、息子の病だけはどうすることもできなかったのです。どんなに深い絶望感を抱いていたでしょう。そして、途方に暮れていた役人がある日耳にするのです。エルサレムの町で信じられない奇跡をなされたお方が、今カナの町にやって来ている。その知らせを聞いた瞬間、彼は家を飛び出していました。わらにもすがら思いで、大急ぎでやって来た彼はイエス様のもとで必死になって、何度も何度も訴え続けたので

す。「どうか来てください、今すぐ来てくださいと、私の息子をいやしてください」と。皆からの賞賛を受ける王室の役人が、大工の息子に助けを求めていました。周りの群衆の目さえいっさい気にすることもなく、ただ愛する息子のために、父親として一心に懇願し続けていたのです。こうして役人が必死になってイエス様を求めていたことは、すばらしく重要なことでした。

気づいてほしいのは、この時に彼が持っていた動機です。この時、彼が持っていた動機はどのようなものだったのでしょうか？この時点での彼の動機は、ただ息子の病がいやされることでした。イエス様を求めていたのは絶望的な自分自身の魂の救いを求める理由からではなく、絶望的な息子の救いを求める理由からでした。彼は礼拝する者として、イエス様のもとに来たのでもなければ、悔い改めた罪人として、あわれみを求めてやって来たのでもなく、単に、自分自身の抱えている問題を解決してくれる存在としてやって来ていたのです。この時の役人は、まだ周りの群衆と同じ間違っただけの思いを抱いていました。

だからこそ、その心をご存じだったイエス様は、48節で「そこで、イエスは彼に言われた。「あなたがたは、しるしと不思議を見ないかぎり、決して信じない。」と言われました。役人の心は、救い主自体を求めていたわけではありませんでした。彼にとってイエス様は自分の必要を満たしてくれて、自分の望みをかなえてくれる手段にしか過ぎなかったのです。そのような人物に対して、イエス様はどのように応答したのでしょうか？自分勝手な思いでやって来た不信仰な者に対して、イエス様は厳しく非難して、そのまま立ち去ってしまわれたのでしょうか？イエス様はあわれみの心を示されていました。王室の役人が必死に訴え続けた息子の病をいやされただけではありません。絶望を覚えていた彼に、ご自分がどんな存在かを明らかにし、そして、何よりも彼自身に最も必要だった救いを与えられたのです。

続きに役人とのやりとりがこのように記されています。ヨハネ49-53節に「:49 その王室の役人はイエスに言った。「主よ。どうか私の子どもが死なないうちに下って来てください。」:50 イエスは彼に言われた。「帰って行きなさい。あなたの息子は直っています。」その人はイエスが言われたことばを信じて、帰途についた。:51 彼が下って行く途中、そのしもべたちが彼に出会って、彼の息子が直ったことを告げた。:52 そこで子どもがよくなった時刻を彼らに尋ねると、「きのう、第七時に熱がひきました」と言った。:53 それで父親は、イエスが「あなたの息子は直っている」と言われた時刻と同じであることを知った。そして彼自身と彼の家の者がみな信じた。」と。何度読んでもすごい光景だと思いませんか。最初、役人はイエス様の力を何もわかっていませんでした。イエス様なら息子の病を直せるかもしれないと期待はしていたものの、そのためには息子のもとに実際にやって来てもらわないといけないと考えていました。ですから、彼は何度も何度も訴えていたのです。「自分と一緒に来てくださいと、どうか死なないうちに一緒に来てください」と。そんな彼に向かってイエス様をはっきりと言うのです。「あなたは私がだれだか分かっていません。息子のところへ行く必要はありません。わたしにはこの場でただことばを発するだけであなたの息子をいやすことができるのだ」と。そして、実際イエス様のことばのとおりになりました。「息子は直ってい」と言われたまさにその時刻に息子の熱はひいていたのです。こうしてイエス様は神の御子としての圧倒的な力を明らかにしました。また、何よりもこのイエス様と出会った役人のかたくなだった心は変えられたのです。

ここで皆さんに一つ覚えていてほしい大切なことがあります。あわれみ深い神様は困難や絶望さえも用いて、私たちのうちに働かれるお方だということです。もう少し王室の役人について考えてみてください。この人物は大きな権力や影響力を持っていました。多くの財産やしもべを持ち、普段であれば望んだものすべてを手に入れることができる高い身分についていました。ある意味何にも困らないような抱える必要があれば、いつでも満たされるそんな環境に置かれていました。自分自身に救い主が必要だとはこれっぽっちも思ったことはなかったでしょう。しかし、神様は、そんな彼さえも見捨てずに、彼の心を砕くために、彼自身の手にはどうすることもできない問題をあわれみによって与えることで働かれました。愛する息子が死にかけていることは、確かに大きな悲しみ、苦痛でした。しかし、その絶望的な状

況によって、彼はただあわれみを求める砕かれた者、救いを必死に求め続けるへりくだった者へと変わったのです。彼は自分自身の手には負えない問題があることに気づかなければいけませんでした。

そして、この真理は今も何ら変わっていません。私たちは時に困難や絶望は、すべて不必要なものだと考えてしまうことがあります。私たちが苦しみや絶望の中にいる時、多くの場合、私たちの思いはその苦しみの中から出ることだけに向いていることがあります。そこから出ることが私たちにとって最善だと考えていることがあります。もちろん困難自体を望むような人はだれもいません。しかし、あわれみ深い神様は救いをまだ知らない者に救いをもたらすために、また主に信頼することの喜びをさらに教えるために、それぞれの歩みに困難や苦難さえもたらしてくださるお方であることを決して忘れてはいけません。私たちの周りや私たち自身のうちに起こっていることは、何もすべて偶然ではありません。何もなかったら自分には救い主、イエス様はいらないと思い込んでいる者に、何もなかったら自分をいつも救い主にゆだねる必要はないと思い込んでいる高慢な私たちに、その必要性和不可欠性を教えるために、あわれみ深い主は試練さえも与えてくださるといなのです。

この点に関してJ・C・ライルというひとりの信仰者も次のようなことばを残していました。「苦しみは、神の薬の一つです。それによって、神は他のどんな方法でも学べなかったであろう教訓を教えてください。それによって、神は魂を罪とこの世から引き離し、そうでなければ、永遠に滅びていたであろう者たちを救い出されます。健康は大いなる祝福ですが、聖められた病はそれ以上のものです。繁栄やこの世の快適さは、誰もが自然に求めるものです。しかし、もし損失や試練がキリストのもとへと私たちを導くのであれば、それらの方が遥かに良いのです。最後の日には、何千もの人々がダビデと共に証言するでしょう。『苦しみにあったことは私にとってしあわせでした。』（詩篇119：7）」と。

考えさせられませんか？果たして、私たちは今このことばのように苦しみや試練をとらえているでしょうか？もしこの中にまだイエス様を知らずに、さまざまな苦しみに直面している方がおられるのなら、神様が苦しみを通して、あなたのうちにある本当の必要に気づかせようとされているのであれば、その働きをいつまでもかたくなに無視し続けしないでください。神様の前に逆らって生きているすべての罪人にとって、最も必要なものは目の前の苦しみに対する解決策ではありません。それ以上に自分自身にはどうすることもできない罪の問題を解決してくださる救い主が必要です。どうかきょうという日に自分のかたくなさを悔い改めて、私たちの罪のために十字架にかかって、死んでくださったあわれみ深い方を自分の救い主として、主として心から信じ受け入れてください。

そして、すでに救い主を信じて歩んでいる中で、さまざまな試練に直面している方もおられるかと思えます。置かれている苦しみがどのようなものかはわかりません。しかし、みことばは約束してくれていることがあります。私たちのあわれみ深い主はあなたが今通っている試練を通して、あなたを主に信頼し、主に似た者へと変えようとされているのです。ただし、その時に大切な鍵となることがあります。私たちが主のことばと主の方法に信頼することが鍵です。役人がまさにそうでした。役人は自分自身には手に負えない問題を抱えて、必死になってイエス様のもとに来て、必死に求め続けていました。しかし、そんな彼がイエス様から「帰りなさい、息子は直っています」と言われた時、そのことばを疑うことはしませんでした。そして、主は確かにそのことばを成し遂げられたのです。感謝なことは同じ主が聖書を通して、今も私たちに語ってくださることです。約束やことばを成し遂げることのできる同じ主が、私たちにも希望となる約束や支えとなるみことばを与え続けてくださっているのです。イエス様自身もヨハネ16：33でこのように言われていました。「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」と。私たちはひとりではありません。約束のとおり十字架にかかり、三日目によみがえった勝利者であられる主がどんな時もとみにいてくださいます。だれよりもあわれみの心を持っていてくださる方が、良い時も悪い時も、喜びの時もまた試練の時でさえも、変わらず

に私たちを支えてくださるのです。そうだとすれば、そんな主にますます信頼して主のことばを素直に信じて、忠実に歩み続けていくことです。

3. ご自身を信じるすべての者に対してのもの 53b—54節

最後にもう一つ、4:53の後半のところから見ていただくとこのように書いていました。「:53……そして彼自身と彼の家の者がみな信じた。:54 イエスはユダヤを去ってガリラヤに入られてから、またこのことを第二のしるしとして行われたのである。」と。先ほども見たように、イエス様と個人的に出会って、その偉大さを身をもって味わった役人は、心が砕かれて救いへと導かれました。初めは、ただ自分自身の願いをかなえてくれて問題を解決してくれる存在としてしか考えていなかったイエス様とそのことばを彼は素直に信じて、礼拝する者として変えられました。死にかけの息子がいやされたことよりも、救い主のあわれみを知った彼のうちにはどんなにたくさんの喜びがあふれていたでしょう。

ただこれですべて終わりではありませんでした。もちろんかたくなだった彼自身が救われたこと自体もすばらしい出来事でした。しかし、主のあわれみがもたらす救いの力は、彼のうちにだけ留まるものではなかったのです。53節でみことばは、「……そして彼自身と彼の家の者がみな信じた。」と言っていました。救いの力は彼の家全体にまで広がっていたのです。考えてみてください。少なくともこの役人の家には多くのしもべたちがいました。病氣からいやされた息子もいたし、奥さんもおそらくはいたでしょう。イエス様と出会って、そのすばらしさを知って帰って来た父親は、ひとりひとりに対して大喜びでイエス様がなされたことを伝えました。イエス様を知ったことの喜びを彼は黙ってなどいられませんでした。そしてその結果、家族全員がただひとりの救い主につながることになったのです。イエス様との一つの出会いとなされた一つの奇跡が、彼だけではなく同じようにして主を信じるすべての者に、救いの喜びをもたらすことになったのです。これがイエス様が示されたあわれみの心でした。

この朝、私たちはイエス様の示されたあわれみの心について一緒に考えてきました。どうでしょうか、改めて思いませんでしたか？王室の役人を、また何より罪深い私たちを希望のない暗やみから救い出してくださったお方の愛や寛大さは、測り知れないほど深いものでした。自分自身を拒絶して、忌み嫌う者や自分を間違った理由で求める者をあわれみ、信じるすべての者に御手を差し伸ばして、あわれみを示されたお方の姿を覚えるのであれば、私たちは今どのように歩んでいこうとしましょうか？私たちに最も必要なお方をいつまでもかたくなに拒み続けるのでしょうか？この方以外の者に、ましてや自分自身の何かに助けを求めて、信頼し続けるのでしょうか？それとも、ただこの偉大な主とそのことばを素直に信じて、主にすべてをゆだねて従順に歩んでいこうとしましょうか？この方が示された模範にならって、たとえ自分を拒む者や忌み嫌い、受け入れない者にもあわれみの心を喜んで示していこうとしましょうか？どのような時も忘れてはいけません。良い時も苦しみや試練に置かれている時でさえも同じです。私たちを支えるのに十分なお方は、ただこのあわれみ深いイエス・キリストだけです。「帰って行きなさい。あなたの息子は直っています。」というただこのことばだけで、死にかけの息子をいやすことのできた圧倒的な力を持っておられるお方が、私たちの信頼することのできる主でした。この方にすべてをゆだねて、歩んでいくことほど最も論理的で、そして最も私たちに大きな慰めをもたらすものはないのです。だからこそ、最後までこのあわれみ深い方に目を留めて、私たちに示し続けてくださっているあわれみを覚えながら、ともにこの方のために続けて歩んでいきましょう。